

---

# ゼロの使い魔～元係長よ永遠に！～

アンサバック

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜元係長よ永遠に！〜

### 【Nコード】

N7282Y

### 【作者名】

アンサバツク

### 【あらすじ】

落雷死した中年おやじが、異世界転生、とある人物に憑依した。憑依先がゼロの使い魔の世界だと知った主人公は、自分の記憶している原作知識を頼りに、てきとくに物語を推理し、勝手な思い込みで行動していく。中年おやじ！ハルケギニアを逝くシリーズ第1段、はたして中年おやじは生き残る事ができるのか？・・・この作品は作者の練習作品です。また、作者の自己満足のため、ネタバレなどもある駄文になっています。それでも構わないと思う方は読んでやってください。

## 第1話（前書き）

いまさらって感じかもしれませんが、投稿してしまいました。退屈な回想もどきですが、お暇な方は読んであげてください。

## 第1話

「信じられないよなあ、あの係長が亡くなるなんて…」

「ああでも、らしいっちゃ、らしいよな、落雷死だもんな、普通考えられねえよ」

「うう、僕、一生係長について行くつもりで、思ってたのに…」

「嘘つけ、おまえっ！係長、半年も前に辞めてんじゃん」

「ああ、ホント突然だったよなあ…まさかの課長昇進か？なんて噂があつたっけ…」

「そうそう、それぞれっ！それまで、ただのセクハラおやじだっと思ってたのに、急にだよな3年前、人が変わったように」

「あれ？お前知らなかったのか、係長きれいな奥さんと娘さん、事故でいっぺんに亡くされたの」

「ううっ、きつと哀しさ埋めるために…仕事で、うう」

「そうだったのかあ…でも懐かしいなあ、地獄の3年間だったけど」

「そうだなあ…業績もハンパなく伸びたもんなあ…」

「ぐすっ、でも今では…見る影もなくなっちゃいましたね…それに課も無くなっちゃいましたし」

「それにしても、すごい参列者だな…1000人はいそうだな」

「なんかアブなそうな奴らがいるかと思えば、絶対、どこぞの社長だつてオーラ出まくりの人達もいるし」

「ああ、あそこに居るのは、名前は思い出せないけど某有名企業の社長さんだな、こないだ雑誌に載ってた」

「いったい、どういう人間関係なんだろうな」

「ぐすつ、知らないんですか？係長、宗教団体入ってたの。遺言で2億寄付するつて、世界の為に使って貰うつて…」

「「「2億つ！」「」」

「しい〜、ぐすつ」

「「「……」「」」

「コホンっ、しかし、遺言つて、イサ気好いのか、好くないのか…それに信じてたのかも微妙だよな…」

「ホント不思議な人だった、都合悪くなるとすぐ、フツ、聞こえんなあ〜、悪党どもの鳴き声はあ〜、だったもんな」

「あつ、なんか似てる…不思議といえば、絶対セクハラでクビになると思ってたもんな、俺…」

「そうそう、社内でも超ベツピンの女性社員の胸とかお尻あんだけさわつてて…嫌がられてなかったんだよなあ」

「ぐすつ、係長には美学があったんです」

「美学つてお前っ…常にわけわからん、誇大妄想としか思えん工口話しかしてなかったじゃねえかつ」

「まあ、もう亡くなった方のことだ、あんまり悪く言わない。それに、その女性陣も参列に来てるんだし」

「あ、ホントだ。秘書課の南女史、前島女史、それと高部さん、総務の近藤さん、水無月さん、え〜と」

「うちの課の栗原に南雲だ。それと、お前の課の藤間さんだな」

「う〜ん、社内で評判の、デキる女性陣達に見送られて、係長も本望つてところかな」

「そろそろ、お焼香、僕達の番みたいです。最後の挨拶にいきましよう、ぐすっ」

「」「あぁ…」「」「」

.....

.....

.....

「とっ、…結局、一睡もできなかった。まあ、それも仕方ないか」

綺麗な朝焼けだ。

これからの『クラウド』としての人生、未来を照らし輝かしてくれ  
たらいいのだが…。

幸い、それなりに原作知識はある。

それに、一晩考え抜いた？結果、オレは、このハルケギニアで生き  
ていくときめたのだから。

しかし、まさか自分が異世界転生、憑依するなんてな。

しかも、平賀才人である。

まあ、実際はどうなのかは判らないが原作での描写やイラストの記  
憶。

そして状況や服装でそういう事なのだろうと思っている訳だが…。

正直、複雑な心境でもある。

なぜなら、ひとつは純粹に、オレのスローライフを返しやがれっ、  
このっ、すつとこどっこいっ！である。

3年かかったが精神的にやっと立ち直り、これからというところで  
この現状…。

もうひとつは、あのまま何十年か掛けて、虚しく朽ち果てていく可  
能性が高かった前世の記憶があるからだ。

それに幸か不幸か、前世での自分の家族、友人、知人などの名前、容姿など酷く曖昧ではつきりと思いつけない。

それ以外はそれなりの記憶がある。

なんせ、自分が死亡する記憶まであるのだから…。

まあ、これは強烈だからあたりまえか…。

………

……

…

オレの死因は落雷死だ。

高速道路のPAで車がパンクしてるのに気付き雨の中、応急用タイヤに交換してたのだ。

作業中ふと、空を見上げると雨雲が白く光った。

そして、一条の光がオレを斜めに貫きブラックアウト。

稲妻が迫ってくるときの体感時間はかなりゆっくりと感じられた。

頭の中では、早く逃げろと命令してるのに体はまったく反応できなかった。



意識を失う寸前、なんか小説みたいだな、とか思える冷静な自分が少し可笑しかった。

どれくらい眠ってたのか、ざわつく周りの気配とそよぐ風、土の匂いや草の香りを感じ、覚醒感にみまわれた。

疑問に思いながらも目を開けると最初に飛び込んできたのは、青い空、空高くにある一片の白い雲。

明日もきつといい天気なんだろうなあ、などと呑気に考えていたりもした。

冷静に振り替えてみると実際、余裕があったのはここらあたりまでだ。

「アンタ誰？」とのかわいい声が聞こえたので起き上がるうとした時だった。

突然、頭のとっぺんから足の爪先まで、なにかになぞられた感じがした。

はっきりいってびっくりである。

おそらくアレはディテクト・マジック。

コルベールがオレに魔法をかけたのだろう。

そのおかげで、オレの新しい器官というべきか、能力に気がつけたのだが…。

なんだ今のは？という疑問と同時に自分の体の中や周りに何か得体の知れない物があるのに気がついた。

体を起こし状況確認してみれば、目の前に異国の美少女。

周りには、同じ服装の少年、少女。

極めつけは、動物や初めて見る生物が飛んでたりする。

異世界召喚？体内にあるのは気とか魔力なのか？しかも体外に溢れ出ている？

それに、視覚、聴覚、嗅覚が異常に鋭くなっている。

夢とは到底思えない。

視覚、聴覚に飛び込んでくる情報が、嫌が心にも現実だと伝えてくる。

平民、召喚など不穏なキーワードに頭が敏感に反応し、さまざまな考えが浮かんで消える。

はつきりとした記憶はないが、このとき原作通りの展開が繰り広げられていたのだろう。

混乱と思考の海に沈みこんだオレが現実に戻ったのは、美少女が目を開き、オレにキスをする寸前だった。

結局、ゼロの使い魔の世界だと確信したのは、お互いの自己紹介が終わったあとだった。

といつても、オレの場合は名前の記憶もなかったので、クラウドと名乗っただけなのだが。

本当はクラウドと名乗りたかったのだが、気恥ずかしくなり、まあそうなった。

雲になれなかった男、というわけだ。

その後は、当然殴つて貰おうとも思わず、気絶もせず、彼女の部屋まで二人で歩いて帰った。

余談だが、オレの傍に落ちていた鞆はなんとかルイズにプレゼントする事ができたと言っておこう。

鞆の中身を確認してみると、やはりノートパソコンだった。

まあ、オレの物でもないし、邪魔だったというわけだ。

たかが落ちてる鞆ひとつで、意外に時間と労力を支払わされた。

けっして、オレだけの所為ではない。

ルイズがルイズたる所以であろう。

それに、この時点での彼女は追い詰められていた？だけに許容範囲ともいえる。

なんにせよ、ルイズのキャラが原作と同じなのだという事に感動もできたし、安心もできた。

半信半疑ながらも鞆を大事そうに抱え、それでいて毅然として前を歩くるイズ。

そのうしろ姿を見ながら、さて自分の事をどう説明しようか？などと悩みつつ彼女についていった。

## 第1話（後書き）

お読みいただき、ありがとうございます。3話連続回想もどきになります。あと2話、退屈かとは思いますが、お付き合い頂ければ幸いです。

## 第2話（前書き）

回想もどき召喚当日第二段です。

才人とは違い、もし気絶してなかったら？

まあ結果的には…

## 第2話

ルイズの部屋に着いてからが大変だった。

まず部屋に入り、偶然自分の姿を鏡で見た時だった。

咄嗟に声を出さなかったのは、日頃の習慣のおかげだろう。

なぜなら鏡の中に見知らぬ十代後半の青年が映っていたからだ。

これにはさすがに驚いた。

オレは年齢38歳、さえない中年おやじとの自覚があるからだ。

さすがに容姿の記憶が曖昧だったとしてもこれくらいは分かる。

それが、鏡の中のオレは若くなっていた。

それにかっこよくもなっていた。

日本人としては男前の部類に、はいるだろうか。

服装も青いパーカーに黒のズボン。

原作イラストに描かれていた服装に似ている。

この時ようやく、自分が平賀才人になっているのに気がついた。

まあ、雷に貫かれて五体満足なわけ無いわな。

鏡を見ながら、しばらく呆けていたのである。

段々冷静になり、ネット小説なんかでもよくある展開じゃないか。

我ながら、もっと早く気づけよな！などと思いながらニヤついていると、殺気を感じた。

横合いから、ルイズの右ストレートが飛んできているではないか。

しかも、ゆっくりと！

ルイズの怒った顔にも一撃必殺がこめられているのがみてとれる。

動体視力が良くなったとかいうレベルではない。

まるでスローモーション映像のように…。

あの落雷の時に似た感覚をオレは感じた。

ただ違うのは、オレが普通に動けるところだ。

その気合の入ってそうなパンチをアツサリかわし、腕が伸びきったところで手首を掴んだ。

途端に時間が通常の流れに戻り、オレは内心驚いた。

それでもなんとか、つんのめりそうに為ってるルイズの体を支えてやり、殴りかかってきた理由を聞いてみた。



ルイズが言うには、ご主人様である自分が何度も呼びかけてるのに無視し続ける。

拳句の果てには鏡を見ながらニヤついてる気持ち悪い使い魔にオシオキを！とのことだった。

まあ、ある意味正当な理由でもあった。

甘んじて受け入れるつもりはないが…。

とりあえず謝り、話題を変えようと呼びかけた理由を尋ねた。

どうやら、このパソコンとやらで異世界から来た事を証明してみなさい！とのことだった。

ぶっちゃけ、素直に従わない生意気な使い魔をなんとかギャフンと言わせ、ご主人様と認めさせたいのだろう。

実際、オレは使い魔をする気はない。

使い魔のフリなら考えてもいい、扱いが悪ければすぐに出ていく！と断わり続けている。

かわいそうかなと思う部分もあるが、譲るわけにはいかない。

ただ、どこまでも上から目線のルイズはやっぱりかわいいつ！と思えた。

べっ別に、つつ、つ、使い魔になってあげてもいいんだからっ！な  
どと思えてくる自分にも不安を感じていた。

パソコンはルイズにあげたのだから、使えるようになってもらう為にも本人に触りながら覚えてもらう事にした。

これは、パソコンに限らず昔からのオレのやり方、覚え方でもあり、指導方針でもあった。

物を覚えるには、経験もしくは実体験に限る！

見るだけよりは、触れて、見よ！である。

だがしかし、習慣とはおそろしい！

オレは人に物事を教えるのは得意ではない。

因みに教わるのも苦手だったりする。

これは学生時代から治らない、一種の病気みたいなものだ。

口調がぶっきらぼうになったり、突き放したかんじになったりするのだ。

なんとかルイズを説得し、パソコンを開き電源を入れるところまではうまくいっていた。

マイピクチャに入っているであろうサンプル画像を見せようとダブルクリックを教えていた時だ。

なんとなく、口調が突き放したようになってしまった。

そこから言い争いが始まり、格闘モードに突入した。

言い合い罵り合ってる内容は、他愛の無い内容なので割愛させて頂く。

ルイズのパンチやキックをしばらくの間、軽く捌いているうちにオシはある事に気付き冷静になっていった。

無口になったオレに気付いたのであるう、ルイズも攻撃を止め、肩で息をしながら睨みこんできた。

しばらくお互い無言で睨みあった後、ルイズが先に折れ、諦めたように机に座りパソコンのマウスに手を添えた。

その後、3度目のトライでコツを掴み、簡単にサンプル画像を見ることができた。

結局、サンプルミュージックを聴いてる途中でバッテリー切れとなり、パソコンは使用不能になった。

この時のルイズは落胆と怒りが混ざりあった表情だったと言っておこう。

彼女にしてみれば、オレはただの平民だろう。

その平民の使い魔を、高価で珍しい道具をもった平民の使い魔へと少しでも上方修正したかったのであるう。

貴族として、メイジとして劣等感に押し潰されそうだった自分が初めて魔法に成功したのだ。

平民と分かりガツカリしながらも、それでも期待したい気持ちがあるのは人間として当然だろう。

まして人生経験の浅い十代のうら若き少女なのだから。

それが文字すら読めない、使い方も微妙、意味不明な道具。

しかも今後まったく使う事ができなくなった異世界の道具だと言っている平民。

更にその使えないパソコンとやらが10万エキュもするなどと…騙されたと思ったであろう。

この時めでたくオレが『平民の使い魔』から『嘘つきな平民の使い魔』へとルイズの中で認定された瞬間だった。

鞆の中身を確認した時、パソコンを10万で買ったと適当な説明をしているので嘘つきとはあながち間違っていない。

ただ10万エキュのくだりは、お互いの通貨単位の認識の違いによる不幸な事故だと思ってる。

草原で話し合ってる？途中でその事には気付いたが、説明するのも面倒くさくなり放置したのだ。

この後ルイズは怒りながら夕食、入浴にいくと告げ、部屋で反省でもしてると言わんばかりに鍵をかけて去っていった。

当然、オレはルイズを騙した罰として晩飯抜きにされてしまった。

しかし、ルイズはいつたい、何をしたかったのだろうか？

この部屋は当然、中から鍵を開けられるのだが…。

まあそれはともかく、このパソコンには最初から最後まで振り回されっぱなしだった。

いつたいどこまで崇られるのやら…まあしかし、収穫もあった。

オレの体内に流れている得体の知れない物の正体が解った。

そう、それは電気だった…

パソコンの電源ボタンをルイズが押したとき違和感を感じ、ジャレ合ってる時にソレに気付いた。

あの時、無口になったのもバッテリーが残り少ないことに気付き、なぜ、そんなことまで判るのか？

また、オレなら充電もおそらく簡単にできる。

そんな思考に捉われたからだった。

しかし、この時のオレは平賀才人に無かったこの能力への興味よりも、もっと深刻な欲求があった。

それは、人間の誰にでも起こる生理現象、尿意をもよおしていたのだ。

そしてここは女子寮、トイレが有るか無いか分からないが、どちらにしても使用不可能なのだ。

女子寮から飛び出し、とにかくオレは人気のない物陰を求め走り出した。

異世界の二つの月に照らされながら…。

## 第2話（後書き）

魅惑の女子寮トイレっ！作者的には、すごく気になってたりします  
…

### 第3話（前書き）

回想もどき第3段、元中年おやじ徹夜するっ！の回。よろしければ、  
ぶじぶじっ！



### 第3話

なんとか小用を終え一息つけたオレは、このルイズのいない自由な時間の使い方を考えた。

まず夕食はルイズの宣告も含め今の状況では、もはや絶望的だろう。食堂の位置はわかる。

この学院の中心にあり、一番背の高い本塔の1階だ。

しかし、原作描写通りルイズのセリフが正しければ入室もできないだろう。

平民認定され、しかも若返ってる今のオレでは…

仮に食堂を抜け、または、裏口を発見し厨房にたどり着けたとして、どうすればいいというのだ？

夕食時のごった返した厨房…

知り合いも居なければ、オレの存在すら知られてはいまい。

誰？お前、何？コイツ状態だろう。

その中へノコノコ赴き、自分の事や現在の身の上をうまく説明し食事にありつけるだろうか？

また、うまく事が運び食事をだされたとして、オレはそこで食事を

食べる事ができるだろうか？

厨房の片隅とはいえ、戦場と化した彼らの職場、聖なる領域だと思える。

その職場で忙しく働く人々の姿を目の当たりにし、ただ一人、食事を摂るなどと…

プロセスとゴールイメージ、どちらもハードルが高いと思えた。

ひるがえって、入浴はどうであろうか？

こちらはなんの問題もなく簡単にいくのではないだろうか。

原作では2種類のお風呂が描かれている。

ひとつは、大理石でできたローマ風呂のようなつくりで、プールのような大きさの浴槽がある。

その大きな浴槽に香水の混じった湯が張られ、天国気分が味わえる貴族専用の豪華なお風呂。

もうひとつは、掘っ立て小屋のようなつくりのサウナ風呂。

焼いた石が詰められた暖炉の隣に腰をかけ、体を温めながら汗を流す。

十分に体が温まったら、外へ出て水で汗を流す、学院で働く平民用の共同風呂。

おそらく学院内で働く平民の人数は少なく見積っても2000人は超えるのではないだろうか。

でなければ、この施設の管理、運営に支障をきたすのは容易に想像できる。

この施設に加え、ここにいるのは教師、学生、全員貴族なのだ！

その300人前後が暮らすであろう貴族達の宿泊サービス、それに警備、馬などや乗り物、はては使い魔まで…

その生活すべてのお世話をしなければいけないとなれば、500人いても不思議でない。

しかも水道設備もなければ、便利な電化製品もない、通信伝達手段さえも直にやるしかない。

おそろしいまでの人海戦術を駆使するしかないだろう。

うーん、ある意味一大巨大企業だな…あつ、国营だったか？雇用の確保だろうと、その時は結論づけた。

そんな大所帯であれば、入浴時間はバラバラで手の空いた者からどんどん入っているのではないか？

そこに少々知らない奴がいても、そこまで気にしないのではないだろうか？

また、マナーや習慣の違いが有っても、そこはリラックスタイム…あまり咎められない気がする。

と、こんな事をつらつら考えながら、人が居そうな本塔に向かっていたら気配を感じた。

前方に人影がひとつ、こちらに向かって歩いてきている。

こちら風で言えば、距離にして100メートル以上は離れている。

どうやらオレは無意識の内に、体内の電気を広範囲に垂れ流しているらしい。

その電気がセンサーの役割をはたし、オレに気付かせてくれた。

と言っても、他人には気付かれない微弱電流とおぼしき物だが…

それにこの時は、やはり知らない場所であり、自分では気づいて無かったが、かなり警戒していたのだろう。

勝手にオレの能力が発動していた。

それと、視力もかなり上がっていた。

月明かりに照らされているとはいえ、やはり薄暗かった。

しかし、この離れた距離でも相手の姿がはっきりと判ったのである。

その相手とは、眼鏡をかけた美人で巨乳のお姉さん、ミス・ロングビルだった。

表情はやや険しい、こちらを警戒してるのが判る。

流石は土系統のエキスパート、彼女もオレに気付いている。

土くれのフーケの名は伊達じゃない！

どうも微妙なエンカウトになりそうだった。

オレの事を使い魔として認識してくれてなければ、不法侵入者扱いだっただろう。

彼女は秘書としても、とても優秀だ。

たとえ目的の為とはいえ、僅か2ヶ月足らずで人の顔、名前、行動パターンなど時間別に把握している伏がある。

おそろしいまでの情報収集力、分析力だ！って言い過ぎか、現代社会ならあたりまえかこれぐらい…

それに全員覚えるわけでなし、うん、普通だな、Bプラスで優秀な部類かな…

そういえば、フーケの犯行は原作なら7日後、虚無の曜日の夜だったか？

ということは警備体制の確認かな？

まあそんなわけないか、ここの警備はザルだって気づいてるだろうし…

お互いの距離が20メートルをきった所で、ミス・ロングビルの表情

が急に柔らかくなった。

そして更に近づいたところで学院長秘書の顔、営業スマイルで自己紹介しながらオレに気さくに話しかけてきた。

やはり彼女はオレが使い魔であることを知っていた。

しかし、こつも表情が露骨に変わるとなんだかなあ…

前世ならあの距離だと絶対気付かず、コロツと騙されてただろうなあ…

内心やっぱり女は怖ええ！どこの女優だよっ！と驚愕してるのを隠し、初対面での無難なやり取りをした。

その後はお風呂に入りたい旨を告げると、彼女は快く了承してくれ、入浴場所にまで案内してくれた。

道すがら、ふと異世界などという概念の無い彼女ならどんな反応が返ってくるのだろうと好奇心にかられた。

それとなく、オレが異世界人であることを告げてみた。

結果としては彼女の仮面は崩せなかったかな？

彼女は平民になって4年目ぐらいだったか？

しかし所詮は社会人4年生、まあ最終的には大人な対応だったのは流石だと言っべきか。

一瞬だけ、キヨトンとした彼女のレアな表情を見ただけ儲けたと思っことにした。

サウナ風呂は想像通りだった事と、オレの男の部分が想像以上だった…恐るべし主人公とだけ言っておこう。

味気ない入浴を終え、ルイズの部屋に帰ると、まだルイズはいなかった。

これ幸いと先程の感覚を思い出しながら自分の能力の事について考えた。

基本的にこの電気は、オレの体から常に溢れ出ている。

まあ実際は垂れ流しだが…

この時は、人畜無害の誰にも気づかれない微弱電流、索敵ぐらいには使えるかな程度のものであった。

これが魔闘気とかだったら、カイ ウ様みたいでなんかカッコいいのに…などとどうでもいい事を思ったりもしてた。

ここから思考がそれ、北 の拳の事を、あーだこーだ考えているとルイズが帰ってきた。

そして、使い魔の役目、役割を一方的に押し付けてくるのだった。

使い魔などする気のないオレは当然、原作知識を活かし優位に反論戦を展開した。

最期は養われる謂れも必要も無いから出て行く！と言えば、とにかく今日はここに泊まらせてあげる！と上から目線。

お互い平行線のまま時間切れ、就寝タイムとなりルイズはベッドにもぐり込み眠り始めた。

そしてオレは床に座り込み、今後の身の振り方の為にも自分の能力把握にしばらく努めた。

ルイズにバレないようにコツソリ試している内に慣れてきて、手足のような感覚でなぜか自由に操れるようになった。

新しい器官ができて直ぐに馴染んだ、というよりは、生まれた時から使い慣れたという感覚に近いものだった。

操り遊んでいるうちに、この電気を操る能力と呼ぶべきか、意外と使える反則級な能力であることに気がついた。

まず、体内から溢れでてる電気だが、オレを中心に球状、いやドーム状にかなり広範囲にまで拡げる事ができる。

基本、球状に拡がっていくが、地中には深く拡がらない、せいぜい2〜3メートルくらいだろうか。

それはともかく、たとえば南の窓から見える森ぐらいまでなら簡単に収められる。

そして、収めた範囲いわばその空間内の情報がいつきに頭の中に流れ込んでくる。



まあ大雑把な情報だが、あそこに大きな生物がいるとか、向こうで小さい生物が飛んでるとかだ。

集中すればもつと詳しく解るかもしれないが、頭から煙が出そうなので止めた。

また指向性を持たして一方向にも伸ばせる事もわかった。

ちなみに縮小するのも簡単で、面倒臭くなったら切り離せたりもできる。

それと、微弱電流だけだと思ってたのだが、オレの意思で狙った所の電流、電圧をも変えられる。

しかも、なぜか魔法にも干渉できた…

面白くなり、指向性を持たして伸ばしたり縮めたりと遊んでいる時、今度は壁、天井、床などの違和感に気付いた。

とりあえず窓枠横の壁に直径10センチ程の電気を貫通させて、なんとなく違和感を断ち切るように力を込めてみた。

すると、その部分の壁だけが違和感がなくなっていた。

おそらく壁には固定化の魔法が掛かっていて、その部分の固定化だけを破壊してしまったとでも考えるしかない。

干渉できたといっても、まあこの程度なのだが、今のところは充分だと思えた。

なんとも出鱈目な能力に満足したオレは、2度目の人生を楽しく満喫しようとして心に誓った。

そして、当然こんな力を手にしたら、やってみたくなる事が男には必ずあるはずだ…

男と女が密室にいるのである……

そう、ちょっとした出来心、ルイズにイタズラ…能力を試してみた。

AVでよくあるエレキマッサージ、健康にもきつといいはず……

彼女の敏感なところへ…

やがて彼女は…

熱いのだろうか？シーツをめくり…

またどんな夢を見てるのだろうか？自分の手で…

いつのまにか大きく脚を…

月明かりに照らされた彼女は、ずいぶん艶かしかった。

最期に果てるときビクンツと仰け反り、満足したのかクテンっとなつた。

この時のオレは、スーパーハイテンションっ！

ベッドの縁にしがみつき、まさにっルイズたん、ハア、ハア状態！

クテンっとなられたときには、危うくパンツを汚しそうになった！

寝言までツンデレっ！…おそるべしルイズ！

この後のオレはやり場の無い衝動感におそわれた。

己の愚かな行動にしばらくの間、後悔する事になったのは言うまでもない。

なんとか、荒ぶるムスコが鎮まるまで耐え抜き、今後の行動方針を纏め上げた時には、朝日を拝む頃だった。

### 第3話（後書き）

つつ、ついに、クラウドの能力が明かされたっ！……まあ、使い方間違ってるけど、この主人公で大丈夫なのか？

## 第4話（前書き）

やっと回想もどきも無事、終了しました。  
元係長クラードの戦い？がいま、始まる…  
お暇な方は、読んでやって下さい。

## 第4話

南の窓から陽の光が差し込んでくるのを見ながら、この世界の未来、また未来の自分の姿に思いを馳せた。

ヴィットーリオ主導で起こされる聖地イベント…

そして3つの文明の融合、融和による風石問題解決…

大円団エピソード後のオレのゆるゆるウハウハなスローライフを…

まあ、単なるオレの憶測と願望だけなのだが…

結局一睡もせず、今日起こる出来事と自分のスケジュールをてらし合わせていると、俄に学院が活気づいてきた。

さて、そろそろルイズを起こすとするか。

「ミス・ヴァリエール、朝だ、起きろ！」

サイトは毛布を剥ぎ取っていたが、オレは肩を揺すっている…

なぜならボディータッチができるからだっ！

「はえ？そ、そう…って誰よあんた！」

「なんだ、寝惚けてるのか？まったく、オレはクライドだ！」

「ああ、使い魔ね。そうね、昨日召喚したんだっけ」

「ミス・ヴァリエール、認識が間違ってる。使い魔ではない。それに、誘拐されたんだ！」

「…あんだ、諦め悪いわね。それより、服」

無言で、椅子に掛かった制服を手渡したら、ルイズはネグリジェを脱ぎ始めた。

とりあえず僅かながらも出るトコはでてる、乳 おつきさ良し、先つちよのポッチンはピンクだ！そして、下の…産毛だ！

今しか見る機会はないっ！常にその覚悟を持っていないとチャンス逃す…おやじとはそう云う者である。

「下着」

「どこにある？」

「そのクローゼットの、一番下の引き出しにはいつてる」

今度はクローゼットの引き出しを開け、てきとくに掴んだ白の下着を手渡した。

となりで下着を穿いている、色気のない穿き方だ。

…いやいや、まてまて色気のある穿き方ってどうやるんだ？

「服」

「どっという意味だ？」

「着せて」

「すまない、ミス・ヴァリエール…オレは脱がすのが専門なんだ」

「……あんだ、なに言ってるの？」

「いや…とりあえず初めてだけど…挑戦してみるよ」

そんなやり取りをした後、ベタベタとボディータッチしながらルイズに服を着せ、オレ達は部屋からでた。

部屋からでると、キュルケが同じタイミングで部屋から出てきた。

そして原作と同じように、キュルケがオレをダシにして、ルイズをからかいだした。

そのうち、使い魔のフレイムも部屋から出てきて、なにやら自慢まじりにキュルケに紹介されてる。

知識で知ってるとはいえ、フレイムはやっぱり迫力あるよなあ、なんて思いながらこっさりキュルケを観察している。

スタイル抜群、褐色肌のキュルケ、そのキュルケの一番興味をそえられる場所といえば…やっぱり右目だろう。

いつも髪の毛が覆い被さってるので、右目がどうなってるのか分からない。



なんとか見えないものだろうかとルイズの後ろでアングルが変わるように動いているのだが、微妙に見えない。

キュルケが話をしながらも顔の角度を変えるのだ。

そんな行動をしていたのだが気付かなかったのか、気にしないのか、オレを見つめながらキュルケが話かけてきた。

「あなた、お名前は？」

「オレはクラードだ」

「そう…クラードね……それじゃあルイズ、お先に失礼」

品定めするような眼差しを向けてきた後、そう言ってキュルケは颯爽と去っていった。

フレームは後ろをちょこちょこ付いていつている。

その後、悔しがってるルイズにオレ達も行かなくていいのか？と冷静に声を掛け、本塔に向かった。

本塔の1階にある食堂に入り思う事はひとつ、やはりデカイ！

そして食堂内には描写にあったように、100人が優に座れると思われる長いテーブルがやはり3つ並んでいる。

学年を表す3種類の色の違うマントを羽織った学生達が、それぞれ

のテーブルで歓談しながら座っている。

真ん中のテーブルの中間からやや手前、そこがルイズの席なのだろう。

その傍の床にオレのと思える食べ物、パンとスープ、いや汁が入った皿が置かれている。

しかし、目が良すぎるのも困りもんだなあ…やはり、ここらもサイトと同じ扱いか。

まあ、食事情も学院を去る理由のひとつにできるかもな…

「なあ、ミス・ヴァリエール、オレの目がおかしくなったのか？床になにやら皿が置かれてるのが見えるんだが？」

「見えるわね」

「一応、確認で聞くが…まさか、アレがオレの朝食でいいのかな？」  
オレは立ち止まり、テーブルの上の豪華な料理と床の皿を見比べてみた。

「あのね？ここは貴族の食卓なの。ほんとは使い魔は、外。あんたはわたしの特別な計らいで、床」

「なるほど…ミス・ヴァリエール、その特別な計らいとやらは必要ない。それに今後の食事についてもだ」

外で待っていると告げ、オレは振り返りもせず食堂から立ち去った。

腹を壊さないかと不安ながらも水場の水で餓えを誤魔化し、食事の終わったルイズと合流して、教室の中にいる。

ルイズの隣に無理やり座り、教室を見渡せば学生と共にいるんな使い魔たちがいる。

カラスに梟それに猫、そしてモンスターとしか思えない使い魔まで、本当にファンタジーな世界にきたものだ。

それにしても、タバサが居るのは予想外だ。

彼女にバレるとは思わないが、それでもやはり気にかかる。

それにオレは、もうてっきりタバサはシルフィード…今はまだイルククウか？の救出に向かっているものと思ってた。

食堂で見た彼女は白タイツでなく、白ニーソだった。

えっ！？外伝版なの？と一瞬焦ったあと、すぐにどちらであっても問題ないと思いついたのも記憶に新しい。

ここからゲルマニア国境までの道のり、そして時間をどれくらいかけたか不明だが追いついた時は夕方だったか。

とすればオレの推測では、7〜8時間はかかったのではないかと思っっている、最速で6時間だろうか？

推定追跡距離が最大300リーグあたりか。

北海道より少し大きいトリスティンなら妥当な線か？

若干ゲルマニア寄りにこの学院はあるのかな？

うーん、このあたりが俄か転生者のキビシイところだな…

現代感覚だと、現チャリで6時間、300キロ走破っ！

…シンドイな、それに時速50キロ、スピード違反で捕まるか？

そんなことを考えていると、土のトライアングル、ふくよかで優しい雰囲気のあるミセス・シュヴルーズが入室してきた。

しかし、ミスとかミセスとか、ここは本当に面倒くさい、未婚、既婚女性でいちいち分けるなよな。

オレなりに直訳すると、人妻女教師シュヴルーズまたは未亡人女教師シュヴルーズになってしまう。

…ダメだっ、レンタルビデオ屋でレーベルのタイトルに騙されて即借りしてしまう自分の姿しか想像できない。

肉づきの良い彼女の体に荒縄が…

苦しそうでいて恍惚とした表情の彼女に…

不貞をはたらいているという思いが…

さらなる咎めを求めて…

自分自身を追い詰め昂らせていく彼女に…

熟した…って、イカン、イカン、イカン！変な妄想モードに入ってしまった。

とにかく、やっぱりミス、ミセスは思考でも練習しとこう、そうしよう…

やっぱりメンドイからいいか、どうせ出ていくし…

オレの目標の為に第一ステップにあたるこの重要な場面で、どうでもいい事を考えれる相変わらずダメな自分…

ふと我に返り教室を見回せば、小学生なみのやり取りがあったのだろう、注意を受けている生徒たちがいる。

しかし思うこんな場面とかがあるから、二次小説で学園扱いされるんだろうなあ…

小学生からエスカレーター式？みたいな…

学院って、オレのイメージだと私立の大学なんだが…

ここって由緒と伝統のあるらしい国立の魔法学院なんだよな？

マサカっ！……オスマンの趣味？

とっ、また思考がそれた、とりあえずまだ大丈夫みたいだ。

とにかく今のオレのミッションは、ルイズに授業中に錬金の魔法をぶっ放してもらう。

その時、オレは自身の防御と彼女に電気ショックを与え、気絶してもらっただけでいい。

その後は当然、教室の大惨事の片付けもせず、堂々とルイズを抱えて医務室に逃げ込み自由な時間を作り出す。

そして、空いた時間で何とか接触し、彼女を口説き落とすしかない。

オレには、午前中の限られた時間しかないと思っている。

その理由はコルベールのおかげでガンダールブばれが起き、監視され始められるかもしれないからだ。

その後は、陰に陽にそれとなく監視される羽目になる、見ている相手はそんな気が無くとも…

また、能力でモートソグニルなど使い魔たちは察知できても、遠見の鏡などマジックアイテムは気付けないと思う。

そしてここではオレに、プライバシーの侵害は適応されないだろう…

かといってプライバシーを守る為とはいえ四六時中、気を張ってなどいられないし…

そんな思考を打ちきり、原作展開と同じになるようにルイズに話し

かけた。

案の定、ルイズは見咎められ指名されて、教壇に立ち錬金の呪文を唱えている。

オレとシュヴルーズ以外は机の下に隠れている。

オレも自分の準備をし、いつでもルイズに電気ショック攻撃ができる状態だ。

そして遂にその瞬間、光と爆風に教室が覆われた。

オレは、すごい爆風にビビりながらもルイズを捕捉したまま電流を流した。

煙が晴れ、教壇があつた辺りを見ると、吹き飛ばされたルイズとシュヴルーズが倒れている。

シュヴルーズはたまにピクピクと僅かに動いている。

……ルイズは動いていないっ！

あれ？あれれれれえ〜……シンゾウガウゴイテイナイ？

オレの能力は電気を操る、電気の流れが解る。

そして心臓、これは一定のリズムで電気を流し心臓を動かしている。

つまり、心臓が動いている、動いていないなど瞬時に理解してしまうのだ。

「るっ、ルイズううううう！」

オレは叫びながら飛ぶようにルイズのもとへと駆け降りていった。



## 第4話（後書き）

たまに、はりきって仕事をするとかムをする…  
みたかつ！これぞ、おやじクオリティー！  
なんのこっちゃ…

## 第5話（前書き）

やらかしてしまったクライドくんが、反省したふりをしながら、思索にふける？の巻っ！

## 第5話

とりあえず今、ルイズと共に、水の塔3階にある医務室にいる……  
よっ予定通りだっ！

ルイズに駆け寄り取り乱しながらも人口呼吸、胸骨圧迫、人口呼吸、  
電気ショックいわばAED代わりだ！

一発蘇生、まさに奇跡だった！

心臓が活動し始めた後も、胸骨圧迫をする……

血液が止まった脳に障害が残らない為に！

もう一度、マウストウマウス…の矢先、オレの体は浮かび上がった？

レビテーションの魔法を掛けられたのだろう、ルイズから引き離された……

魔法を掛けたのは、騒ぎを聞きつけ駆けつけてきた、女性教師だった。

冷静さを欠いていたオレは、魔法を断ち切りなんとか着地。

なぜ、邪魔をする！とすぐさま女性教師に食って掛かった。

その時、女性教師はキョトンとしていた……

そのキョト顔を見たオレは急速に冷静になった。

まず、ルイズの魔法が爆発し、間近にいた二人が黒板に叩きつけられた事。

その影響でルイズが心肺停止状態になった事…

やむを得ず、自分の国に伝わる応急処置を施した事を伝えた。

そしてルイズが未だに、意識不明状態なので、医務室へ運びたい事…

それとルイズに何か羽織る物を用意してほしいとお願いした。

女性教師はオレの事を疑いの目で見た後、それでも、傍にいたメイドに指示をだし段取りをしてくれた…

とりあえずルイズにはパーカーを被せ、彼女の露出している部分を隠した。

本当はマズイのかもしれないが、自分が運ぶと強硬に言い張り、横抱きに抱えて医務室まで運んだ。

なぜなら彼女の気道確保と規則正しい呼吸、そして心臓のリズムを聞きたかったからだ…

はあ、失敗したなあ…

それにしても、よくまあこんな俄か救命隊員がわりのシロートで復活したよなあ…

しかしビビったとはいえ、高電流ながしたら、そら普通に死ぬわな…  
やっぱ、高電圧でないとな、スタンガンみたいに…

ホント、奇跡だよなあ…これが所謂、主人公補正的な強運？

…まさかギャグ補正？

そういや、ギャグ補正っていえば、サイトって頑丈だよな…

それに病気ひとつしないし……まさかつ！不死身？

重症の連続にもかかわらず、ケロっとしてたし…

何より、あれだけせつない処を蹴り上げ……想像したら鳥肌たった！

たしか、この医務室だったよなあ…

ティファニアとベアトリスのエピソードの後、窓ぶち破って飛び降りるのって…

オレは、窓越しに覗き込んでみた。

……普通に死ぬる、なんて……たつて3階だもの。

まあでも、テファのミラクルな部分を揉んでいい思いしてたんだし…

あれ？でもサイトもあの時、死の予感感じてたような？

……まさかつ！これがホントのミラクル補正？

しかし、あの女性教師の蔑むような目、結構コタえたなあ…

まああの感じだと、魔法をオレに破られたって気付いたわけではなさそうだな。

どっちかっていうと、女生徒に淫らな行為をした変態痴漢野郎疑惑！…

あとは、平民風情がつ！てな感情というところか…

まっ、当然っちゃ当然か…

ここには心臓マッサージとか人工呼吸なんてないだろうし、魔法でなんとかするんだろう？

知らない人間からすれば、気を失ってる女性に、キスして胸まさぐってる痴漢行為にしか映らないわな…

それに平民がそんな技を公開すれば、魔法を脅かす方法として異端かどうかの微妙なラインかな…

ブリミル教か…

ある意味ブリミルの呪縛…

まあ、ブリミルの名前だけが勝手に歩きまわっているが…

どちらかと言えば、少数民族だったマギ族の恐怖心ゆえの産物だろうな…

ブリミルの時代、いわばヴァリヤークの王達によって支配されてた時代みたいに逃げ回るハメになるなど…

おそらくこの、政治体制ってヴァリヤークがやってたのを模倣してるだけなんだろうな…

首の挿げ替え、ヴァリヤークからマジ族へと…

それが延々と6000年、愚民政治を…

まあ、愚民でなけりゃ統治できないわな。

特にブリミルを失なった少数のマジ族が10倍以上を…

しかし、ブリミルは偽りの生を、いったいどれくらい送ったのだろうか？

なんせ、エルフだからなあ、使い魔が…

それにブリミル、フォルサテ親子二代でって可能性も高いし…

うーん、わからんっ！まあどうでもいいか…

まあどちらにしても、初期のブリミル教って、知識、技術に対してはかなり神経質だったのではないだろうか？

特に平民階級の人達を厳しく取り締まったのだろう…

平民は学んではいけない、団結してはいけない、それに武器に対する規制、あらゆるものに対して…

そして、ブリミル教会が平民の学舎というわけか…

いつしか、技術を磨くこと、力を合わせて試練に打ち克つこと、自分達ならできるといふ気概すら失なってしまった…

そうして第二、第三のヴァリヤグの芽を摘んだというわけか…

6000年、人間に無力感を与え、抵抗力を奪い、隷属化させるには充分過ぎるほどの時間だ…

しかし6000年かあ、上手い年代設定にしてくれたものだ…

こうすれば、風呂敷広げやすくなるもんなあ…

例えば、6000年毎に大災害がおきるとか…

そのたびに、一族内に救世主みたいな連中が現れたりして…

ブリミルの時代より更に6000年前、約12000年前だと地球の伝承、言い伝えなら、超古代文明滅亡か…

ムー大陸、アトランティス大陸などの伝説…

これらの大陸の末裔とかだったり…そういや、これはエルフにも当てはまるか？

それに6000年前、地球では紀元前4000年あたりで、突如と



して高度文明が現れたんだよなあ…

チグリス、ユーフラテス川の間、下流域あたりに…

謎の多いシュメール人が興した、シュメール文明！

確認が取れてる人類最古の文明…

やがてメソポタミア文明へと発展、いや吸収されてしまう…

そして、この文明が日本を含め先進諸国、西欧諸国などに受け継がれている…

自然に抗う文明、自然と戦う文明、自然をコントロールしようとする文明という意味でなら…

こう考えるとやっぱりシュメール人で、なんとなく…てな展開かな？

しかし、そうなるとヴァリヤークが支配してた地域って、ハンパなく広大だよなあ…

少なくともこちらでの、イラクからハルケギニア全土か…

アルビオンが微妙で北欧っぽいあたりはどうだったのだろうか？

しかし最大でも、こここのイランあたりからアラビア半島、ハルケギニア全土ではないだろうか？

まあ、アラビア半島があったらだけど、なんせ、イベリア半島がないくらいだからな…

なんてこつたいっ！リーガ・エスパニョーラがっ…

それはともかく、イランあたりと考えたのは、こちらでは、ロバ・アル・カリイエがあるからだ。

そのロバ・アル・カリイエの位置が地球でいえばインドあたりではないだろうか？

なんとなく、ヨーロッパの人達からの東方つて、イメージ的にインドかなってな理由だが…

そして、6000年前のロバ・アル・カリイエもそれなりの文明を築いているだろうという勝手な推測だったりする…

でも、いまではきつと…

もうひとつのアラビア半島でできたのは、やはりエルフの存在だ…

サハラと言うからには、どう考えてもアフリカ大陸だろう…

例えば、この世界のアフリカ大陸の砂漠化が地球と違っていた…

そして、エルフがエジプトのあつた辺りにいたら…

仮定の話だが、エルフの防衛線は突破できないだろうな…

エルフはどちらかといえば、防衛戦の方が得意なのではないだろうか…

エルフは精霊の力を行使する、その土地にいる精霊と契約を交わし強力な魔法が扱える。

ルクシヤナも言っている、ひとつの都市を吹き飛ばすことも、やろうと思えば簡単にできると…

ただ、サーシャが言っていたように、争いに使いたがらない描写もあったのでこれは個人的意見なのかどうかは判らないが…

まあ、そのエルフが拠点を築いて防御に徹したら、生半可な攻め方ではくずれないだろうな…

その土地そのもの、いや自然そのものが敵として立ちほだから…

まして災害クラスの魔法すら有り得るわけだし…

ハルケギニアの人間が、ガリアの東端にあるアーハンブラ城を取り戻しという描写がある…

オレは軍事のシロートだが、これくらいなら分かる…

エルフが戦略的に無意味と考え、退去したのだろう…

その理由としては、その時代あたりで、船の性能、操船技術が向上したと考えればしっくりくる。

それまでの聖戦は陸路で大軍団を送り込む戦略をとっていた人間たち…

しかし、聖地は海にある！

そして、聖地には場違いな工芸品がある…

それを盗りに人間たちは空海路を使って、船でくるようになった…

エルフ達にとつては、自分達の住んでる所から、ずいぶん離れた場所  
所で防衛する意味も意義も無くなった…

ロマリアって、たしか位置的にギリシャだったよな…

どうにか往復もできるんだろう…

それに、ハルケギニア版どこでもドアもあるしな…

そう考えるとギリシャだと位置的にいえば最前線か…

ロマリアの国の在り方も古代ギリシャに似てるし…

何より、ヴァリヤーグって呼び方が、古代ギリシャのバルバロイや  
バルバロスなどの呼称にそっくりなんだよな…

そしてサイトの夢、リコードの魔法で見せられた、ブリミルとヴァ  
リヤーグの戦い…

あれって古代スパルタやアテナイの人達と20万、50万とも云わ  
れてるペルシア軍との戦いをモチーフにしたんだろうな…

エルフはブリミルが巻き起こした大災厄後に空白地帯になった土地  
に進出したのかな？

エルフが何処に住んでたのか謎だが、今は描写にもあったハルケギニアの東にある海洋都市…

そして、聖地はやっぱり、地球と同じ場所なんだろうか？

まったく、北欧神話を隠れ蓑にいろいろ謎を作ってくれるから俄か転生者には、さっぱりわからん！

裏主人公のアイツなら、きっと知ってるんだろう…

くそっ！そんな事はどうでもいいっ、それよりも左手のルーンだ！

やっぱり消えとらんがな、残ってまんがな…

つつことで、やっぱりオレが死なんと無くならんのやね？

ジョセフが死んだ後、シエフィールドがフリゲート艦諸とも自爆した描写はたしかに微妙だったな…

アレはミヨズニトニルンの能力使ったんだあ程度に読み流してたし…  
…

ん？リーブスラシルの能力ってわけだけではないって事が…

それにしてもアノ野郎っ、ホント悪辣だよな、たくっ！……

しかし、このルーンはホントに呪い級って、まてよ…

オレの能力で……、まあ、いいかあ、面倒くさいし…

とりあえずこれで、虚無が死せども、ルーンは消えずと、てきとうな名言みたいなのはわかったし…

でも実は時間の経過と共に、経年変化とか酸化とかして錆びてきたら嫌だなあ…

さび止めスプレーとか無いだろうし、有ったとしても定期的に体にさび止めスプレーって……

うん、やっぱり固定化の魔法かな？

さてと、そろそろ行くかあ、リズムもとりあえず心配なさそうだし。それに、いま目覚められてもこまるしな、身動きとれなくなりそうで…

あとは、医務室にいる人達に任せて、オレは本来の任務にもどらせてもらう…

決して忘れてたわけじゃないっ！……たぶん？

第5話（後書き）

次話はついについ！アノ人にアタックっ？

## 第6話（前書き）

今回は、クラードくんがなけなしの知恵を使ってきっかけ作りに頑張りますが…



## 第6話

つつ、遂に、やって参りました！本塔5階、宝物庫前に…

しかし、描写にもあったが、目の前にある鉄の扉はデカイ！とにかくデカイ！

そして、鉄の扉には門が取り付けられ、更に門にも、大きな錠前が付付けられており完全防備になっている…

うむ、このおっきな錠前を仮に開けても、扉開けられないよなあ…

そうかつ！オレの左手には、たたり神からの呪いがあるじゃないか！

きつとアシ カのように…

あつ、でもアシ カは右手か、それに呪いも広がらないし…

おバカな思考はとりあえず置いて…

武器を手にして、この扉をどうにかできるか微妙なところだな…

それにしてもこの錠前、鍵穴デカすぎっ！

鍵穴の中、丸見えて…

しかも、メチャクチャ単純な構造だし…

まさに開けてくれと云わんばかりだ、流石はファンタジーってところか…

でもこれって、簡単に錠前破りできるよね…

……………見えるっ！見えるゾっ！

あのマチルダに、ロケランプレゼントして、嫁ゲットした未来のオレの姿がっ！

そんな妄想でテンション上げてると、人の気配を感じた…

階段を見上げると、ロングビルさんだ…

フツ…けっ、計算通りだ！

「あれっ…こんにちは、ロングビルさん」

「あら、あなたは…クラウドくん、こんにちは。どうしたのですか、こんなところへ？…学院長にでも？」

「いえ、時間が空いたので…学院の探索でもと思ってブラブラしてたら、この大きな扉があったので」

「そうですか…ここは学院の宝物庫になりますから、クラウドくんは…あまり近づかないようにしませんとネ」

彼女は、オレを気遣うように、やさしく微笑みながら諭してきた。

なるほど、ここで目立たれると自分の目的に支障をきたすんですよ

ね、解ります、メガネのお姉さんっ！

「やっぱりそうですよね…今のオレって、平民でしたっけ？それにこの錠前、簡単に開けられそうだし」

「えっ!？」

「いや、だから簡単に開けられるでしょ、鍵なんか無くても…マズイですかね、この話題」

「い、いえ、大丈夫ですよ…クラウドくん、それでどうして簡単に開けられると思うのですか？」

「さつき、鍵穴覗いたら単純な構造でした。これ位の平たい棒があればオレなら簡単に開けられますよ」

「そっ、そうですか…ちょうどよかったですわ、クラウド君、ちょっとお姉さんのお仕事手伝って下さるかしら？」

そう言いながら、彼女は杖を取り出し呪文を唱えた、おそらくサイレントの魔法だろう…

「ええ、かまいませんよ…綺麗なお姉さんの頼みならハハハッ」

「フフ、そんな事言っても、お姉さんは騙されませんし、何も差し上げられませんわ」

「いえいえ、アンタが成功報酬ですから…」

その後、彼女は30センチぐらいの鉄の棒を、二つ錬金して渡してきた…

しかし、ほうきを錬金って、いいのかよっ！

そして、予想通り簡単に錠前を開ける事ができた…

といつても、結局ロックの魔法解除するのに、電気能力を使ったわけだが…

バレないんだよな、コレが…

あとは、門はレビテーションで、扉は念力の魔法で軽々と開き、宝物庫の中へとすんなり入った。

宝物庫に入ってからオレは、脇見もせず前を歩くロングビルさんにおとなしく付いていつている…

まあ、キョロキョロして何かを物色してるように思われたら嫌だしな…

…ウソです、すみません。彼女が歩きたんびに揺れるんです！

プリンっプリンって、その豊満なお尻がっ！

目を離すなんて、そんなバカげた選択ができるはずがないっ！

しばらく進んでいたが、彼女が急に立ち止まった…

おそらく見つけたのだろう、破壊の杖を！って、オレ、どんだけ尻  
ばっか見てるんだ？

見てみると、細長い箱の上に、ロケットランチャーが置かれてある…

その前には、文字の書かれたネームプレートと思われる物もある…

破壊の杖とでも書かれているのだろう…

きっと彼女は、ほくそ笑んでいるのであろう、オレからは見えない  
が…

その後も、進んでは止まりメモを取るといふ事を何度か繰り返し宝  
物庫を出た。

オレは宝物庫にいる間中、喋り掛けたりせず、おとなしく彼女の後  
ろで仕草などを観察した。

まあ、メガネをかけた知的なお姉さんに見惚れていたってところだ…

それに、ヘタに喋ると墓穴を掘るハメになるかもしれないからな…

そして、仕事の人に話し掛けるマナー違反もあんまりしたくない  
しな…

おそらく彼女は、最悪の場合の逃走経路、ついでに盗めそうな品、  
それにオレに対する警戒や使い途など考えただろう…

しかし、ついでに盗むのは勘弁してもらいたいなあ…

怪盗って呼ばれるならターゲットのみ、なんかコッチのほうがカッコいい！

宝物庫の扉を閉め、門を取り付け錠前に鍵をかけた。

鍵をかけたといっても、もうアン・ロックの魔法で簡単に開くだろう…

これでオレの役目もオシマイかな、あとは彼女を口説くだけっと…  
食堂のある1階へと、二人で降りていきながらアピールをしてみたら、返事を濁された。

フツ、あたりまえだ！このオレに出会って間もない女を、口説き落とせる才能などないっ！

それに結婚したのも20年近く前だしな…

何より、なんで結婚できたのか自分ですら謎だからな…

あとは彼女に語った与太話と姉御気質、それに孤児属性に期待かな…

まあオレは、孤児っていうより迷子だよなあ…

それも世界をマタにかけたって…あれ？人生の迷子！？

まあ、もうどうでもいいか、それより、オレが語った与太話というのは…

一つめは、オレが目的のある旅の途中で誘拐まがいに召喚とやらで拐われてきた事…

ちなみに、目的とは自分の妻になってくれる女性達を探しており、その妻たちと幸せな人生を送る事になってたりする…

二つめは、月が一つしかないところに住んでいた事…

三つめは、帰れそうにはないが、べつに何処であろうとも、自分の目的は遂げられるので、近いうちにこの学院から旅立つ事

簡単に言えば、こんなところかな…

1階に着き、食堂手前で彼女とは別れた。

別れ際、彼女に二日後旅立つ事を伝え、旅立つにあたり調味料を少しわけて貰えるよう頼んでみた。

それと、迷惑でなければ時間が空いた時にでも文字を教えて！無理ならしょうがないかなと言っておいた。

しかし、どうしよう？このタガネみたいな鉄の棒…

結局オレが持ったままなんだが、この犯行道具…

あれ？これはもしかしてヤバいかな？

へタしたら破壊の杖盗難事件の犯人に仕立てあげられる可能性もあるな…

オレが旅立った後、破壊の杖が無くなってるっ！？てな事にでもなったら、真っ先に疑われるよなあ…

とっ、とりあえず、この鉄の棒処分だな…

そうだっ！裏の森にでも捨ててに行こうっとな…

「はあ、しかし腹へった…。なんでオレが…」

愚痴は言うまい、己が選んだ道だ！

「どうなさいました？」

人の気配は感じていたが、まさか、このオレに話し掛けてくるとは…  
振り向くと、大きい銀のトレイを持った…シエスタが立っていた。

なぜ？おかしい、このタイミングで…

世界の修正力か？…バタフライ・エフェクトっ、そういう事か！

「あっ、いやっ…なんでもない」

オレは驚いた顔をしてるだろう、しかし、彼女の視線は左手に注がれている…

鉄の棒を持った、ルーンを刻まれた左手を…



「あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になったっていう…?」

「ああと、クラードでいい、それよりかわいいメイドさん、お名前は?」

「かwつ、しつ失礼しました!ここでご奉公させていただいてる、シエスタっていいいます」

「そっか、シエスタって言うのか、かわいいね!それと、残念だけど間違ってる…オレ、使い魔じゃないんだよね」

「え、でも…召喚の魔法で平民を呼んでしまったって…噂になりますわ」

「ふ〜ん、噂ね…しかし召喚かあ、応じたつもりも無いオレからすれば、これって誘拐なんだけどね!」

「誘拐って!そんな事、いまのを貴族の方にも聞かれたら、大変なことになっちゃいますっ」

「大丈夫だよシエスタ、そんなに慌てなくても、それにオレ(グウ〜ウ〜)…」

「…もしかして、おなかすいてます?」

「…いや?」

根性のない腹のせいで、いろいろとダイナシになったがオレはある

ことを彼女に告げた…

そして食事を断り、困惑しながらも心配そうな表情をしたシエスタと別れ、森へと向かった。

## 第6話（後書き）

次話は、森の中での食料調達とクラードくんのダメっぷりをカミン  
グアウト？

## 第7話（前書き）

！ 腹ペコクライドは果たして食事を食べる事ができるのか？の巻きっ

## 第7話

シエスタと別れたオレは、学院の裏にある森へと食料調達にきている。

食事を断り、彼女に告げた事によって起きるかもしれない変化の事など、今のオレにはどうでもいい事だ…

「フハハハハ、雑種の身でありながら、この森の王である我の前を横ぎるとは、万死に値する！王の財宝！」

トスッ…。

鉄の棒が地面に刺さった、なさけない音だ、しかも、この至近距離で…

「え〜いつ、雑種め…おらあっ！」

トスッ…。

おいしい！ちっ、ぴよんぴよん、ちょこまかと、ウサギめっ！くそっ逃げられた…

「おいっ雑種っ！興がそがれた、見逃してやる！どこへなりと行くがよいっ！」

…なめくさってるな、このウサギっ！

逃げもせず、またオレの周りをぴよんぴよん跳びくさりやがって！

「やめだっ！やめだやめだあゝ、こんちくしょう！…ちっくしょ  
ゝゝ！」

完全体だったらあゝ！のセリフをのみ込み、オレはその場に寝転が  
った。

やっぱり、オレには向いてない！金ぴかは無理だ！

まず、指が鳴らん！ぺしゅっだ！ぺしゅ！

それにオレ向きのアーチャーっていえば、やっぱりアレだな、あの  
赤い奴。

あれ、ん、なんだったっけ？

ん、と、たしか…不器用なイキ方しかできない…性技の味方だった  
っけ？

特技が…個室決壊！無限の性生！

…ん、コツチだったよな？

それともコレ、AVのパロディ物だったっけ…ん？

そうだ！アーチャーの呪文って、なんかカツコよかったよな、オレ  
的に当てはめてみると…

体は電気で出来ている…き、キターっ！

血潮は酸で心は鉛…なんか、バッテリーっぽくなっただけど、まあいいか

幾たびの戦場を越えて今は無職…はっ、半年前に辞職したんだよなあ  
ただ一度も結果が出せず、ただの一度も評価されない…いつイヤな記憶だなあ

彼の者は常に独り狭い部屋で安酒に酔う…だんだんムナシさが募ってきたゾ

故に生涯に意味はなく…たっ、確かにっ！クッ

きっと体は、電気で出来ていた…ダメだっ、ダメダメすぎるっ！

なんかもう、どうでもいいやっ、記憶もごっちゃになってるし…

それに、電気系って学校とか職業を連想して迫力に欠けてるし…

うっん…やっぱコレかなあ『ライトニング』コルベールのおっちゃんもいってたしな、うん、そうしよう。

いまだに逃げずにいる、ウサギの方に目をやると、なにやら赤いものを啄んでいる。

んっ！あれはイチゴか？

うん、なんか季節が違うような、しかし、あの赤い実は…

まあファンタジーな世界だ、そんな事もある、うん。

…そういや、シルフィードのエピソードでそんなのがあったな。

なんだっ たっけ？変な名前のイチゴ…

そうだ！蛙苺だ…

カエルイチゴって、そういわれると、どことなく形が…

腹が減ってるオレは、無心で実を摘み、パーカーに包めるだけ包んで、学院へと帰った。

鉄の棒は、あのイチゴのある草むらに2本突き刺したまま残してき  
た。

当然オレは、草むらに背を向け一度も振り返りはしなかった…

おかげで遠回りするハメになった…

学院に帰り、女子寮の下にある水場でイチゴを洗って、おいしく1  
人でいただきました（笑）…

一口めはやはり、勇気がある！



オレは、この身体は不死身のサイトの体だつ、心配ない！と自己暗示をかけ、かぶりついた。

かぶりついた後、まいう〜と叫ばなかった自分を誇りに思う…

腹が膨らむと、やはり余裕がでてくる。

シエスタとのやり取りの、その後に興味が湧いてきた…

出会うハズのないシエスタに声を掛けられた時、さすがにオレは恐怖を感じた、世界の修正力かと…

その後すぐにバタフライ効果に気づき、取り乱さずにすんだのだが…

まあ、ギーシュとの決闘イベントを回避できてる今では、杞憂だったわけだ。

あの時は、イベント回避したくて行動しているオレがイベントを消化しないと物語が進まないのかと誤解した。

そして、シエスタがなぜ銀のトレイを持っているのかが何となくわかった。

案の定、ルイズに食事を持っていった、とシエスタから確認もとれてる。

シエスタは厨房つきのメイドだ。

そして、学院長室へ食事を持っていく事も多いはずだ…

まあ、シエスタばかりではないだろうが…

今日みたいにコルベルが訪ねてきたり、急な仕事で学院長室から出られなくなったりして…

ん？オスマンって、仕事なんかやってんのかなあ…

話がそれだが、原作でサイトと出会った場面は、間違いなくそのケースだろう…

しかしオレの場合は、それを手配するロングビルと一緒にいた…

ロングビルも食事の時間に気がつき、学院長達の食事の手配をしないと、と言って食堂に向かっていたのだ…

彼女と別れて僅かな時間、それに当然オレは、メイドが来るとしても食堂側からだ…

そして、食事を運んでる人間が、わざわざオレに話し掛けてくるとも思わない。

それに本塔入口側からやって来る人間は、食事を摂りにくる学生達だけだと思っていた。

だからあの時、訝しく思いながら振り返り、そしてシエスタを見て驚いたというわけだ。

オレは、初期の学院内で起こるイベントは、能力把握とルイズや学

院内の人達との人間関係向上と認識している…

この学院を去ろうと思っっているオレには、ほぼ必要のないイベントだ。

食事を断わったのも、ギーシュとの決闘に巻き込まれる確率が高いのでイヤだった。

ギーシュに負けるとは、まったく思わない…

ガンダールブ無しでも勝てる、今のオレなら…

なにがイヤかといえば、まず、目立ちたくない！

それに、勝った後の事を想像してしまった…

ヴェストリの広場での決闘…

野次馬的に群がる学生達、その中心に立つギーシュとオレ…

そして決闘が始まり、体感時間の変わったオレが、ワルキューレをすり抜けギーシュの目の前へ…

その間は一瞬、誰の眼にも留まらないはやさで…

ギーシュを一発殴り飛ばし、倒れたところへ降参を迫る…鉄の棒？

…鉄の棒っ！？

そう、オレの手には鉄の棒が握りしめられているであろっ…

犯行道具と疑われるかもしれない鉄の棒が…

そして、勝利後の厨房にいるマルトーのオヤジたちがオレの事をこ  
う呼ぶ…

『我らの棒』と…

……なんて卑猥な呼び名だろう。

仮に、100万歩譲って厨房内だけ容認したとしよう、そして、そ  
れが拡がる…

その後、オレが街中を歩いていると、たまたま、この学院関係者に  
出会う事もあるだろう…

その時に呼ばれるのである『我らの棒』と、たとえ人通りの多い場  
所であろうとも…

それを聞いた貞淑な貴婦人、淑女の方々はきつとナニかを想像し顔  
を赤らめるであろう…

………イヤだつ、イヤすぎるっ！

無理だつ！受け入れられない！

そんな未来の自分の姿を想像してしまった。

だいたい、オレはこの世界を救う英雄になりたいわけじゃないっ、  
ましてや魔王にも！

それにこの国を、いやハルケギニアを救うとか変化させるのは、  
やはりそこで暮らす人達の仕事だろう。

オレは、ちょこっと手伝うだけだ…

それにオレには変な能力がある分、現代日本より今のこの世界のほ  
うがいい！

そして、笑うことなかれ！

オレがやりたいのは、ハーレムの構築、いや両手に華かな？…

そのハーレムでも、ライオンの社会構造を模した、ライオンのオス  
ポジション…

オレにとって、都合のいい群れだ！

現代日本ではできない、いや、できなかった、さえないおやじであ  
ったオレの当面の目標だ！

原作知識というチートを使ってまで行く、おバカな目標だが…

ライオンの社会構造はすばらしい！

そして、やっぱりライオンのオスはいい！

仕事（食事の為の狩り）は、メス、子育てもメスがする…

オスの1日は、食っちゃ寝、食っちゃ寝、子供と戯れ、たまに吼える。

そして番いとなったライオン夫婦は、食事も摂らずに1日に20〜40回も夜の運動会に励むって、もう夜だけのレベルじゃないな…

そう、種の保存本能、一族の繁栄の為に無限の性生、いや無限の性欲か…

ライオンのオスとは酒池肉林のなあ〜うわっはっはっは〜イカ  
ン本音がっ!?

とっ、本音ダダ漏れな事を考えてるうちに、風と火の塔の間にある  
中庭、ヴェストリの広場にやってきた。

こっそり覗いてみると、居る!居やがるっ!

金髪にワインをかけられたようなシミが浸ってるシャツを着た男が…

夕日とまではいかないが、西に傾いてる陽を見るように、三角座り  
をしたギーシュだ!

おそらくアノ感じだと、こっぴどくフラれたんだろなあ、2人の女  
の子に…

あの背中を見せられる男(敗れた勇者)に声を掛けられる程の丈夫  
ではない、このオレは…

ドットとはいえ土のメイジであるギーシュ、それ以上近づくの  
を止め、オレはしばらく彼の背中を眺め続けた。

さまざまな事を想像した後、オレはヴェストリの広場からそっと離れた。

さらばギーシュよ、偉大なる先人、君の野望は潰えた…

が、しかあし、このオレが君の意思を受け継ぎ、いつか必ずオレだけのハーレムを築くと、胸に誓いながら…

哀愁漂う背中がひとつ、寂しく残る広場を跡にした。

ルイズが女子寮に帰っているのがライトニングで分かったオレは、そのまま女子寮へと向かっている。

しかし、あのギーシュの感じだけでは、はっきりした事は結局判らなかつたな…

シエスタはちゃんとオレの忠告をきいてくれただろうか？

シエスタとの別れ際、オレは占いと称して彼女の顔に受難の相がでていると告げた…

食堂内に薔薇が見える、それと床に落ちている小瓶、これには絶対に関わらないほうがいいと…

そして、これは貴女だけでなく、貴女の知り合いにまで波及するであろうと…

…………… 一体、どこのエセ占い師だ！

それにしても、ルイズだけは何故か判るんだよなあ…

これが虚無と虚無の使い魔の絆の所為なんだろうか…

それにオレがハルケギニアになにかと理由をつけて居残ろうとする、この気持ちも…

あれ？確かルイズの傍にいる時だけ発動する的事、タバサが言っていたような…

うーん、わからん！

普通に考えても、姿の変わった今のオレでは元の世界には戻れない、それこそ戻り方すらわからない…

仮に戻れたとしても生活が成り立たない…

戸籍も無ければ金すらない、家族はもういないし知人も分からない。

では、サイトのいた世界での日本はどうだろうか？

おそらく帰れるだろう、というよりも、ここにしか帰れる場所はない、サイトなんだから…

しかしだ、これは実はオレが行きたくない！

サイトの記憶がまったく無い、思い出すら無い…



当然、両親、友人、知人なども分からない…

所謂、記憶喪失状態だ！

そして、一年以上は行方不明扱いになる、ご両親が捜索願いをだしてるからな…

そこへ、ひよっこり帰ろうものなら、社会的に大問題になる可能性がある…

まあ、考えすぎかもしれないが…

そして、サイトのご両親という最大の問題が残っている！

もうオレのなかでは、彼らを一生騙し続けるしかないのでは、などとほとんどあきらめている…

まあ、ウダウダ考えても始まらない。

どちらにしても、離れて暮らす事になるだろうし…

もやもやしていた部分を多少なりともすっきりさせながら、女子寮3階、ルイズの部屋の前まできた。

そして部屋に入ると、オレの帰りを待つ、落ち込んだルイズがいた…

## 第7話（後書き）

次話はクラウドくん、ルイズを慰める？  
しかし、実は…

## 第8話（前書き）

まさかつ！クラウドが人を慰める？  
もし、よろしければ読んでやってください。

## 第8話

「どこに行ってたのよ…ご主人様のお世話もしないで…」

オレが部屋に入ると、ルイズはベッドで横になっていた…

シーツを捲り、けなげに座ろうとしながら声を掛けてくる…

そして声には元気がない、多少の責任を感じていたオレは…

「ただいまっど…どうしたんだミス・ヴァリエール？いつものらしさが無いじゃないか…大丈夫か？」

「…どこ、行ってたのよっ！」

「おっつ、ちょっと調子でできたな、まあなんだ、裏の森へだ」

「…そう」

「おいおい、ホント重症だな。やっぱり…体どこか具合悪いのか？」

「……ったでしょ」

「え？ちよっと、き」わかったでしょ、ゼロのルイズの意味が！ア  
ンタ…なんでなんにも言わないのよっ！」「…」

なんだ…この展開？

……ん、ゼロのルイズの意味ねえ…なるほど、ふむ。

「そういう事か…ああ、なるほど、ミス・ヴァリエール…ゼロのルイズの意味はなんとなく解った」

「あ、アンタもわたしをバカにするのねっ！つつつつっ使い魔のくせ」そうじゃないっ！！」「ビクッ

「ああ〜とっ、わるい、ミス・ヴァリエール…まあ聞いてくれ、オレの知ってる物語を」

「えっ？」

「オレの国いや世界中全ての人が魔法を使えない、そんな世界で作った魔法の国の物語だ、少し興味湧いてきたる？」

「そ、そうね、まあ、それほど言うなら聞いてあげるわよ…」

「ああそうか、まあ絵本ばりに端折るから聞いてくれ」

「これは、とある魔法世界、ひとつの国の名家、そんな名家の三女の魔法少女のお話…」

「……………」

「厳格だが優しい両親、ツンデレもとい、やや素直でない所のある長女、病気がちだが、包容力のある次女、そして我らが主人公、三女のルミルちゃん」

「か、家族構成はわかったわ…」

「この家族はみんなが優秀な魔法使い。しかしルミルちゃんだけは魔法を上手く使えません。それでも彼女は小さな頃から魔法の練習を一生懸命がんばりました。それでも、やっぱり魔法は上手くできませんでした「うっ！」」

「そんなかわいい三女の為に、両親と二人の姉達は自分達のできるありとあらゆる方法を使って原因を調べてみましたが、さっぱりわかりませんでした」

「……………」

「やがて、魔法が上手くできないままルミルちゃんも大きくなり、魔法学校に通わなくてはならなくなりました。心配ながらも、仕方なく両親や二人の姉達も送り出さなくてはなりません。なぜなら、魔法学校に通わなければ、ルミルちゃんの将来にキズがつくからです」

「……………」

「しかし魔法学校で学んでも、やっぱり魔法が上手くできません。そのうち友達もその事が解り、ルミルちゃんの事をバカにするようになってきました。少し悲しくなったルミルちゃん、それでもルミルちゃんは負けません！根性だけは世界一！「ちよつとお、黙って聞いてれば、あんだ、やっぱりわわあwわたしのこと」ま、まま、物語、物語、それじゃあ…」

「魔法に勉強に毎日がんばってるルミルちゃん、ある日、ルミルちゃんの友達のこの国のお姫様が訪ねてきました。そして、ルミルち

やんにムチャぶり、もといあるお願いを頼みにきました。そのお願いとは、隣国の王子様に手紙を渡してきてほしいという事でした。内心そんなの王宮がやれ…友達想いのルミルちゃんは快く引き受けました。お姫様は手紙と一緒に旅の助けにと、王家に伝わる指輪と一冊の本を渡してくれました」

「あ、ありえそうだわ…」

「しかし、これがルミルちゃんの運命を大きく変える出来事だったのです」「

「えっ!?!」

「この王家に伝わる指輪と一冊の本は、実はこの国を作った伝説の魔法使い、その伝説の魔法使いの秘宝だったのです。そんな事は知らないルミルちゃん、手紙と秘宝を持ってそれこそ大切な物だろうと肌身離さず隣国へと旅を続けます。そんなルミルちゃんに窮地が訪れます。山賊に襲われるのです。ルミルちゃんは魔法が使えませんが、そんな状況で戦う事ができないのです。そして逃げ道も塞がれ、もうダメえ〜っ、と思ったとき「ゴクッ」

「指輪と一冊の本が輝きだしたのです。あまりの眩しさに山賊達は目が眩みました。一方ルミルちゃんは不思議な感じがして、その輝く本のページを捲りました。その本の中には伝説の魔法使いの言葉と呪文が書かれていました。その言葉とは、自分と同じ系統の魔法使いだけが使える、全ての魔法の呪文が封じ込められている。必要な時に覚えられるであろうと。ルミルちゃんは頭の中に入ってくる呪文を唱え、魔法で悪い山賊をやっつける事ができました。魔法のできなかったルミルちゃんは、なんと、あの伝説の魔法使いと同じ系統の魔法使いだったのです。そして、これがルミルちゃんが初めて魔

法に成功した瞬間だったのです」

「わたしと大違いね、こんな…」

「その後、無事に隣国の王子様に手紙を届けたルミルちゃんは、ほとんど魔法が使えるようになりました。ただ、魔法は魔法でも普通の魔法使いが使う魔法は、やっぱり扱う事ができませんでした。そのかわり、強力で強大な魔法使いとなり、心優しいルミルちゃんは、世界の為にみんなの為にその魔法を使ったのでした。そしていっしか彼女の事は、聖女のルミルと呼ばれるようになりましたと、おしまい、パチパチパチつと、こんな話がオレの国では、あふれかえっているんだ、ミス・ヴァリエール…」

「そつ、そつ…」

「ミス・ヴァリエール、授業で聞いた失われた系統魔法『虚無』手掛かりは王家に伝わる秘宝つてとこかな」

「!?!」

「なんせ君の初めての成功事例、魔法の無い世界から異世界人であるオレを誘拐した、凄い嫌な魔法だからな」

「なつ、ななな」別に嫌味でも怒ってる訳でもない、ただ正しく使つてほしい、聖女のルミルちゃんのように」

「…あんたはやっぱり平民ね。こんなの架空の話じゃない！魔法の事を全然わかってないっ！」



「ああ、そのとおりだ、ミス・ヴァリエール…ちつともわからんな。オレのいた所では魔法なんてなかったからな。そんなオレだからこそ分かる事もある」

「どういう意味よ…」

「じゃあ、まずオレの質問に答えてくれないか？」

「…」

頷く事なく無言で見かえしてくるのを肯定と判断したオレは…

「オレの話にあつたように君は、誰からも魔法が上手く出来ない、成功しない、だからゼロと呼ばれてる、違つかい？」

「ええ、そうよっ！」

「まあ、そんなに怒らないで…オレからすると魔法は発動している、成功という観点を除けばだが」

「…」

「君達は発動しているという事を忘れて、失敗の方にはかり目を向けている、違つかい？」

「…ええ、そう、だったわ…ね、でも、誰もわからないの、父様も母様も…」

「まあ、そうだろう。固定観念、既成概念は時として柔軟な発想の

妨げになる、魔法で何ができて、何ができないかがわかってるからな…」

「…」

「そしてオレにはそういったモノがない。だから分かるのさ」

「…」

「そうだな系統魔法、火風水火だったか、火ならファイアーとか、ファイア・ボール、風ならエア・ハンマー、ウィンド・ブレイクなんて、言うんじゃないのか？」

「…ええ、そうよ」

「まだあるぞ、昨日空を飛んだのはフライ、鍵を開けたり、閉めたりするロック、アン・ロック、あとサイレントなんて魔法もあるんじゃないのか？」

「…っ!」

「何で知ってる? って顔してるな。勘違いしないでくれよ、適当に魔法の名前を言ってみただけだ。こんなのは、オレの国なら大概の奴が知ってる。物語が沢山あるからな…」

「…」

「そんな物語の中で、属性とか系統なんてのも、当然出てくる。例えば、7種類の系統魔法があつて、5種類の基本系統は誰でもが扱えて、残りの2種類の上位系統は選ばれた者しか扱えないとかな…」

「でも、それだと…」

「ああ、あとこんな縛りのケースもある。さっきの物語に出てくるルミルちゃんと同じ特化型だ！ミス・ヴァリエール…君はまさしくそのタイプだろう」

「……………あんた、ほんとにその、わ、わたしのこと虚無の系統だと…信じてるの？」

「ああ、確信してる、ミス・ヴァリエール…そして、危ういとも」

「危うい？」

「まあそれはオレのいた国だったらの話だけど、まず間違いなく見せ物か、研究材料にされるわな…」

「そ、そそそんなこと、と、おお、トリスティンである訳ないじゃないっ」

「そうか？この国の事は知らないからな、用心するに越した事はない。話すのも家族だけ、それも出来るだけ早く」

「そ、それもそうね…そうするわ」

「そうしてくれ、でないとオレが二日後に旅立ち難くなる」

「なっ！なに、勝手な事言ってるのよっ！つつつつつ使い魔は主の側にいないといけないのっ！」

「それは動物とかの話だろう？オレは人間だ、己の主は己だけだと思ってる。使い魔は受け入れられない…」

「　　っ…！…ていって！出て行きなさいよっ！もうっ、勝手にすればいいんだわっ！」

「……ミス・ヴァリエール、できれば笑顔で別れたかった…君の実家の使用人見習いにしたとでも言っておけばいい」

そう言った後、彼女の姿をもう一度見てオレは部屋をでた。

オレはなんて身勝手に非情な男なんだろう…

女子寮から遠く離れるまで、そんな事を考えながら歩いた。

フツ、一日早まったが、概ね計画通りか…

オレは思っている事が顔に出易い男だと自覚している。

演技力も微妙だ…

だが、アレぐらいどうという事ない…

夫婦生活をした事があれば、あの程度の修羅場、いや修羅場とすら

呼べない又ルさだ…

ジャリ銭だけを握りしめ、涙ながらに何度オレが家出したことかっ！

…なんでこんな記憶は鮮明なんだろうか？

しかし、これではらくルイズとはお別れだな…

まあ、忠告に従ってくれたら生き残るかな、その前の家族会議で死ななければ…

あとは、ラ・ヴァリエール家の問題だ…

それに、ヤバかったらアイツらがなんとかするだろうしな…

まっいいや、暗くなる前に森にいつて、いちご採ってこようっと！

しかし、今度は肉も食いたいよなあ…。

## 第8話（後書き）

やっぱりね…

次話は、クラウドくんが暴走ぎみに！

あと残り3話で魔法学院編終了いたします。

## 第9話（前書き）

クラードが暴走？

…そして卒業？

よろしかったら、読んでやって下さい。

## 第9話

チチチチー、バサバサバサッ…

「ふえっ、ふえっくしょんっ、グスっ…さぶっ」

いかん、やっぱりカゼひいたかな？さつぶ…

しかし自業自得とはいえ、ここ数日酷い目にあってると思っ…

まったく、徹夜で超過勤務の上、昨日は野宿だ！

あるゝひい、もりのっなつかうだっ！

ちくしょゝまぶしいゝ朝日がまぶしすぎるぜっ！

それにしてもあの女狐め！やっぱりこのオレを、犯人に仕立て上げる気だな！

…これで、よくわかった、可愛さ余って憎さ百倍とはこのことだっ、こんちくしょゝめ！

昨日はルンルンでイチゴを採って、森から学院まで帰ってきた…

なぜか？門が閉まっていたので守衛に声をかけた…



帰りが若干遅くなり、陽も暮れ辺りはもう薄暗くなっていたのが災いしたのだろうか…

守衛に不審人物認定されてしまった…

なぜ？こんな時だけ真面目に働く！猛烈に抗議したい心境だった…

争うのも面倒臭いオレは、いぶかしむ守衛に取り次ぎを依頼、ミス・ロングビルにクラウドと言えはわかると…

居心地悪い中、しばらく待っていると守衛からの返事は、なんと、存じあげません！ときやがった…

仕方なくオレは、そうですか明日明るい内に出直しますね、とニッコリ言ったか言わないうちに捕まりかけた…

そして森へと逃走、あの2本の鉄の棒が突き刺さっている草むらで一夜を明かした…。

さて、どうしたものか…

昨日の昼間は問題なく通れたが、昨夜の一件で果たしてどうなるか…

うーん……………そういや、この森にシルフィードがいたな。

フム、…この大きいのがそうかな？あつちか…

オレはシルフィードとおぼしき生物のいる方向に歩いていった。

ぷっぴい、ぷっぴい、ぷっぴい……これは、6時頃から昼過ぎま  
でのてきとうな時間に起こった出来事だ…ぷっぴい、ぷっぴい。

ふあああああああ…

これは、なんの音だっ？

……答えはシルフィードのあくびだっ！

ジャック・バ　アーふうに心の中で言ってみた。

オレは今、シルフィードを観察しているところだ…

自分で作ったのか、天井まである、いいねぐらで住んでいる…

「太陽さん、おはようなのね…はっ！？…しゃべっちゃった！」

竜が喋っているっ……嘘だあっ！オレは信じないっ、信じたくない  
っ！

C　U 応答してくれえ…そんな、まさかっC　Uうゝ

心の中でしつこくジャックごっこをしていると…

「「……………」」

オレはそこから飛び出し、咄嗟にアシ 力をやってみた…

「我が名はクラード、東の果てよりこの地にきた。そなたは、このしし神の森に住むと云う、旧き神か？」

「きゅ〜い？」

やっぱり去れとは言ってもらえなかったが…せつかくネタまでやったのに、コイツ首かしげてトボケやがった。

しかし、ここまで噛み合わないとは…

もうガンダールブいらないっ、古今無双の心の強さが欲しいやつ！

「なんだ〜ハハハ、やっぱり空耳かあ、この世界の竜はただの獣だな。喋るわけないわなあ〜」

「ちがうのねっ！シルフィ今カチンときたのね〜！」

のね、のね〜と頭がやっぱりアレっぽい、ほんと分かりやすい子だなあ…

まっ、とりあえず寝めところ、子供はやっぱり寝めるにかぎる！

「おっ！すげ〜、やっぱり喋れる！それにシルフィって名前かい？いやっ、カツコいいなあ、うん、似合ってる」

「きゅい！お姉さまがつけてくれたのね、きゅいきゅい、シルフィードなのね！」

「おおー！じゃあ、改めてオレはクラウド、さっきはすまなかつた。バカにするような事言っただけだ。」

なにが、おおー！なのか自分でもよくわからんが、ごめんといいながら頭をさげた。

「もう気にしないのね。それよりシルフィ、おなかですいたのね。お肉たべにいくのね、きゅい、きゅい」

きりかえハヤツ！シルフィード、お前って…

「いやっ、ちょ、ちょっと待ってくれ！シルフィその、やっぱり…人間の姿になったりできるのか？（ゴクリ）」

「当然なのね。シルフィは偉大な古代の眷属、韻竜の一員なのね。人間に化けるのなんて、あさめしまえなのね」

「ほんとか？じゃあ、オレに見せてくれないか、人間になったところ。朝飯前なんだろう？」

「いやなのね、なんで黒いのに見せないといけないのね」

黒いのって、クラウドだ！たくっ、だったらてめえは、青いのだっつうのって、段々オレが子供っぽくなってきたな…

「あれ？あれれれれえ〜やっぱ嘘だったのか。な〜んだ、朝飯前とか言ってたのにな」

「むかつ！嘘つきじゃないのね！この偉大な韻竜のわたしをつかまえて…黒いのっ、見せてあげるのねっ！」

「へえ〜、もし人間に化けたら…なんだったら、オレが褒美を出してやってもいいぜ」

「きゅい！黒いの、その言葉覚えておくのね！…我をまとう風よ。我の姿を変えよ」

呪文とともに、シルフィードの周りに青いつむじ風がまとわりついた…

そして、見目麗しい青く長い髪の若い女性があらわれた…すっぱだかの！

「……………」

「黒いのっ！これでわかったのね、さあ、お肉を渡すのね」

シルフィードの美しさに見惚れていたが、喋るとな…それに褒美が勝手にお肉にすり変わってるし…

「あ、ああ、それよりシルフィ、服きないのか？」

「シルフィは韻竜なのね。服はきかないのね」

どっ、どっという理論だっ！…ん、やっぱり間違ってるな、うん、竜だしな。

「なるほどな、シルフィは裸族だもんな…じゃ、いつちよオレも付き合っよ」

そして、オレは服をすばやく脱いだ…

森の中、青い空にまぶしい朝日、しびれるほどの開放感だ！

朝っぱらから…日本だと完全に犯罪だな。

「なにをしているのねっ、それに、変なのが上にむいてるのねっ」

「シルフィだけ裸だと変だしな、そして逆にコレは変じゃない！やっぱり人間の事知っておいた方がいいみたいだな」

「必要ないのね、きゅい」

「まあまあ、そう言わず、ご褒美あげるから…四つん這いになって、目をつぶってごらん」

「きゅい、ご褒美っ！わかったのねっ、目をつぶるのね」

「そうそう、ご褒美、ご褒美っと、じゃあ、しばらくじっとしてるんだよ〜あとはクラードお兄さんにまかせてね〜」

ここからはR15を激しく逸脱するため描写できません。  
しばらく、お待ちください。

それとこれはハルケギニアでも、たぶん犯罪です！  
クラウドはいろんな意味でいけないことをやっています。  
よい子のみなさんは絶対まねをしないでください！

……

……

…

「あゝ最後の最後でヒドイ目にあった。うっへゝ全身めっちゃめっちゃ  
モイスチャーちゅーねん…」

しかしさすがは古代の淫竜、なかなかネバかったなあ…

シルフィ変なのっ！を連呼するし、たまごができちゃうのねゝとか、  
ホントうるさかったなあ…

その全てをオレは、大丈夫、大丈夫でのりきった。

もう少しボキャブラリー増やさないとな、課題がみえたな。

そしてシルフィの言葉、変なのくゝるゝ！のあとオレの視界は真っ

暗になった、一瞬、ザキヤマが見えた！

そして…はっ、そうだった、シルフィードの人化が解け、オレはナニカに吸い込まれたのだ、そうナニカに…

オレには小人願望はない！断じてないっ！

……しっ、しかし、…世界はやっぱり……広大ななあ。

しばらく、遠くをみるように黄昏ていると、体が乾いてきた。

シルフィードは気を失ったままで、目覚めそうにない…

オレはいそいそと服を着て、気を失ってるシルフィードを残し、その場を跡にした。

しかし、失敗したよなあ…

シルフィードに乗って学院に入ろうと思ってたのに…

うゝん…！

フツ、オレのムスコに見境いという文字はない！

…名言だっ！いや、迷言っ、迷言の完成だっ！

つい、ムラっときたんだよなあ…



でも、これってある意味、デビューが人間でないって事なんだよな  
あ…

うーむ、ファンタジーな世界だし…アリかな？

そつ、そうだ！オレは能力を確かめてたんだ！

げ、幻獣種にも通用するか…そつ、そうにちがいないっ！

そんな事を考えながら森出口まで進んでいると、なにかが落ちてい  
た…

青い髪をしたメガネっ娘、タバサだった！

## 第9話（後書き）

ある意味卒業ですかね？  
人としてはどうかと…

そして、タバサがなぜ？

次話につづく

次話クラード勝負する！

## 第10話(前書き)

クライド勝負にでる？

よかったら、読んでやってください。

## 第10話

あ、ありのまま今起こった事を…、もういいかな…

オレは躊躇いながらも、タバサに近づいて行った。

何故躊躇ったのか？

フツ、愚問だな…愚問すぎるうっ！

そんなの決まっている、決まりすぎているうっ！

オレはタバサの…：…かくれファンなのだああああっと…

誰に何をカミングアウトしてんだ、オレは？

しかもかくれファンって、なんとも中途半端な…

しかし、もし、もしもだ、アナタは何者？みたいな、ありそうな質問をされたら…

感激しすぎて、シヨンベンチビってまうって…だからオレは誰に語ってたんだ？

まあ、そんなことより…

ふむ、しかし何故タバサ嬢が、こんな森の中で…？

傍にはシンボルマークともいえる大きな杖が転がっている…

そしてメガネはズレていて、不恰好ながらも仰向けに寝ている…

ん、なんかさっきのシルフィードとおんなじ格好だな…

大きく脚をひろげて、はしたないっ！女の子なんだから、もうっ…

そんな事を思いつつ、オレはタバサのスカートが捲れているのいい事にしゃがんで覗いてみた。

なんか白いパンツが濡れてる、太ももまで垂れた跡も…

…これは、事件だっ！事件は現場で起きている！

一瞬、BGMが流れそうになった…

それにしても、オレのタバサをこんな状態にしゃがるとはっ！

犯人見つけたら、タダじゃおかねえ！

しかし、アノ手練れのタバサを、それに放置…

これは、ただの辻斬りの仕業じゃねえな…

オレの中の十手持ち魂に火が着いた…

ふむ、しかし、なぜ…

はっ、そうかつ！使い魔との視覚共有やってたんだ…

ちょっと、タバサには刺激が強すぎたんだな…

……。

「被疑者、かくほ」

オレは、右手で左手を取り押さえた。

「がんだるぶお、お前を、連続ワイセツ行為、及び、児童福祉法違反の容疑で、拘束させてもらう」

「ガクッ」

そしてオレは、おもむろに膝をつき、その場で土下座した。

地球の方向はわからないが、やらすには要られなかった…

1億いやっ、地球にいる全てのタバサファンに申し訳なかったと、すまなかったとそんな思いで何度も頭を下げた…

もし、見ている人がいれば、かなりシユールな光景だっただろう…

もしくは、なにかの儀式に見えたかもしれない…

ひとしきり、そんな行為を繰り返したオレは心が軽くなった気がした。

義理を果たしきった感に包まれながら、オレは振り返りタバサを見てみた。

まだ目覚めてない、なんてビッグチャンス！

こんなチャンスは二度とない、やるべし…

いやいや、ここは地球代表としてだね、もっと紳士的にだね…

そんなふうには、心の中で葛藤している内に、少し冷静になった。

しかし、タバサほどの者が、視覚共有だけでこんなふうになってしまふものだろうか？…

まさか、感覚共有までって、そんな訳ないわなあ…

そんな描写なかった気がするし…

しかし、おんなじカッコウってのが…まさかな？

オレのタバサを、いつまでもこのまま放置という訳にはいかない。

とりあえず起きて貰おうと、ドキドキしながらタバサを揺すってみた…

やっ、やっぱり…ボディータッチはサイコ〜！

「ん、ん……　　っ！」「ドサッ

「……………」

タバサは気だるそうに起きあがり、オレをぼんやり見た後、一瞬で気絶した…

声を掛ける隙もなかった…

これだと原作みたいな展開は、まあ期待しない方がいいな…

あんまりなタバサの反応にへこみながらも、オレはタバサを背負い、杖を回収して学院に向かった。

オレは全神経を研ぎ澄まし、背中にあたる感触を楽しみながら学院内の広場に、やってきた…

人気のない方向に歩いてきたら、ここになった…

もしここが学院の東側ならアウストリの広場という事になるのだが…



陽は高く、もはや確かめる術もないオレは、勝手にそう思う事にした…

そして広場にあるベンチに杖を立て掛け、タバサを腰掛けさせて、オレはその場を去った。

願わくは、彼女が白昼夢であったと勘違いしてくれる事を期待して…

実はあの後、タバサを背負っていた為か学院に拍子抜けするほどアツサリ入ることができた。

学院の門は開いており、守衛にも見咎められる事もなく、スンナリと…

昨夜から始まり、先程までの気苦労は一体なんだったんだあ〜と心の中で叫びながら…

しかし、いくらオレが温厚な元おやじだったとしても、何食わぬ顔をして働いているだろ？女狐には、やはり腹が立つ！

二度とオレにあんなふざけたマネができないよう教えてやる！

そんな負の感情が沸々とわき上がり、そして満ち溢れてきた。

きつとこの瞬間だけは『おやぢ』の領域に到達していただろう…

アノ某名門音楽学院女子寮の偽管理人おやぢの領域に…

しかし本塔に向かっている途中で冷静になり、自分の置かれている状況が不利な事に気づいた…

まず、立場もしくは肩書的に学院内での信用度の差が大きい。

かたや優秀と思われる学院長秘書、かたやポツとでの平民の使い魔、これでは勝負にならない…

それに、学院陣営のオレへの監視の強さがどのレベルなのかも判らない…

慎重に逝くべし！警鐘がオレを支配していく…いやっ、字が違うから！

オレは昨日の出来事を思い出しながら、それによって起こりうる可能性を想像していった…

オレの言動、彼女の思考パターン、時間的制約、学院陣営の関心度の強さ…

しばらくその場で考え耽ったあと、オレはひとつの決論にいきました。

きっかけは、張り巡らしていたライトニングによって、マチルダが学院長室を離れた事が分かったからだった。

賭けにはなるが、このままで済まず気のないオレにとっては千載一

遇の好機だった。

彼女に接触するため、オレは本塔へと向かって歩きだした…

「やあ、ロングビルさん、こんにちは」

「あら…クラード君こんにちは…昨日はどうなさったのです？文字の勉強を誘いに伺ったのですが…フッフ」

「ええ、おかげさまで色々用事ができまして…それよりロングビルさんこそ、どこかへお出かけですか？」

「いえ、…宿舎の方に忘れ物をしたものですから…」

「なるほど！じゃあオレもお供してもいいですよ？暇なんで…それとも何か不都合でもロングビルさん？」

「いえ、それは…でも独り暮らしの女性の部屋を覗くなんて、あんまり感心できる行為ではないですわ」

「覗くだなんて心外だなあ。旅立つオレにとって一目惚れした女性の最後の思い出つすよ。絶対ついてきます！」

「そ、そうですか、それではごいっしょに…」

「ええ、もちろんよろこんで！いやあ、オレ感激だな〜ハッハッハ」

「ちっ…」

本塔の入口で接触できたオレは、周りにいるメイドなどの使用人達に不審がられないよう振る舞った。

その後もオレたち二人は、他愛のない話をしながら、別々の思惑を胸に秘め、そしてついに彼女の部屋に到着した。

「それじゃあ、クラード君はそのソファーにでも腰を掛けててね。今、お茶を淹れるから…」

「ありがとうございます！いや感激だなあ、ロングビルさんが淹れてくれたお茶が飲めるなんて…いい思い出になるなあ」

見えなくなった彼女に返事をしながら見回していると、部屋全体に魔法が掛けられたのを感じた…

そして、片手で二つのカップを乗せたトレイを持った彼女がオレの座ってるテーブルに近づいてきた…

「あつ、ロングビルさん、オレなんかの為に…お時間大丈夫ですか？」

「ええ、こんな事言っただけ…学院長はおやすみの時間なんです。その間はお仕事は休憩なのですわ」

「へえ、お疲れなんですわ学院長も…それでいつもはどれくらいなんですか、その休憩時間は？」

「それは日によって…だいたい2〜3時間ぐらいですわ、どうか  
なさいましたか？」

オスマン、あんたホントに仕事やってんのか？

この状況でもツツコミ魂に火が点きそうになりながら彼女をみつめ  
た。

トレイをテーブルに置いた彼女がオレの逆手側に立ち、様子を窺う  
ようにみつめてくる。

そして杖を持つてるであろう別の手はオレに隠すように背後に廻し  
てる、なんとも不自然な姿勢だ…

こんな無手の平民にまったく油断しない彼女を見上げながら、己を  
信じてカップを手に取り一口飲んだ。

口の中で時間をかけ味わった後、オレはカップをテーブルに置いた。

「何を企んでいるんだい？…坊や」

「あれ？口調を変えましたね…泥棒さん」

「ちっ！そこまでお見通しだったとはね、なかなかやるじゃないか  
坊や。で、なんで分かったのさ？」

「まあ、最初から？…それに、あの盛り上がってる布の下に見覚え

のある箱がチラッと見えてるし…」

「…なかなか見所あるじゃないか、なんだったらわたしと組むかい？せいぜい扱き使ってやるよ」

「おしおきだべえ、これ、企みの答えです。それと組みましょう！上下関係まったく逆のかたちで…」

「アハハハ、ナメられたもんだねえ、このわたしも…坊や、いたい誰に口きいてるか分かってるのかい？」

「さあ？そんなことより…あれ？なんか眠たく…く…そつ、…  
…がく…」

「プツ、アハハハ、やっぱり坊やは坊や！まだまだだねえ…かわいそうだけど、知られたからには死んでもらうよ」

「…へえ、やっぱり容赦ないですね、そうこなくっちゃ。ヤル  
気が出ないですよっ」

「なっ！なんで…効かないのさ？坊や、いったい何をや…」

「いえいえ、ちゃんと効いてますよ…ほらっコレ！」

オレは彼女の言葉をさえぎり、ズボンの盛り上がりを強調した。

「なっ、バカかいつ坊や！眠り薬がなんでそんな処に効くのさっ！  
つき合ってらんないよ…スリープ・クラウド！」

「無駄だ、今のオレには…ねむれる鬼畜魂に火が点いたオレには、なっ！」

「なに、わくギャツ！」ドサツ

変な雲に覆われたが、ライトニングバリア（祝！勝手に命名）を張り巡らしていたおかげで無効化できた。

そして虚をつき、彼女にスタンガンチョップ（爆！さらに勝手に命名）をおみまいした。

「おやおや、どうやら眠ってしまったのは泥棒さんのほうでしたね。クッククッククックッ、ワッハッハッハッハ」

とりあえず自分の悪役っぽさに納得したオレは、彼女の服を脱がしてソファーに衣類などでガチガチに拘束した。

まあ、拘束のかたちはオレの趣味が反映されたモノになってしまったが…

それにコレは、秘書である彼女の言葉遣いの教育の一環として…いや、うむ…

そうコレは…彼女にライトニングの実験…もとい、オレの能力把握、うん、能力把握っ！

それにしても、最後の必殺技がなんだかデビルンっぽいよなあ…うっん、課題がみえたな！





## 第10話（後書き）

タバサ嬢、今回は難を逃れられてよかった、よかった。  
一方、完全に拘束されてしまった彼女の運命は…

次話、クラウド覚醒？

乞うご期待！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7282y/>

---

ゼロの使い魔～元係長よ永遠に！～

2011年12月4日02時15分発行